



TITLE:

吉田城さんを偲んで--プルースト研究会のこと、訊ねそびれた疑問など (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

山路, 龍天

CITATION:

山路, 龍天. 吉田城さんを偲んで--プルースト研究会のこと、訊ねそびれた疑問など (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 382-388

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138036>

RIGHT:

吉田城さんを偲んで

——ブルースト研究会のこと、訊ねそびれた疑問など

山 路 龍 天 Ryuten YAMAJI

吉田城さんとは、淡い関係であったが、それはとても暖かいもので、私はとても気に入っていた。学会および東西のブルースト研究会ではほとんど毎回お目にかかりながら、その活躍ぶりを程よい距離をおいて眺めているのは、とても心地よい気がしたものだ。

京大助手をしていた1970年、はじめて出合ったが、新米教師の教養部LL教室への義務の出講では、授業するだけで精一杯、よく出来るただし髪のアフロっぽい好青年という以外に記憶はない。そのうち見るみるうちに若くして著名なブルースト研究家として頭角をあらわしていかれた。ある学会の折に、たまたま宿泊先の同じホテルで、ご母堂に子供の世話を委ねられて、乳母車を曳かせていられる姿をお見かけした。「母です」と気軽にご紹介くださるので、同業の奥さまとの役割分担もなかなか大変だな、と思った。以来、ご母堂と乳母車の姿を地方の学会では幾度か見かけたが、乳母車のなかのお子は次々に替わっていたはずだ。ご夫妻がともに学会で役があるときには、それこそ大変だったろう。

1984年に渡仏したころ、84年の暮れだったか85年の一月だったか、パリの街中アレジア近くで、お逢いしたことがある。東洋語学校に出講しておられる折で、その時も出講に向かう途中とか、カフェに入ることもならず、出合い頭の10分ばかりの立ち話であった。話がどういうわけでそれにいたったか、ちょっと恥ずかしいことながら、私が自転車に乗れないと話すと「僕も自転車には乗れないんですよ。だって輪がたった二つで、どうして立つんです？」二人でからやかに笑った記憶が、いつまでも心に残っている。この時期のすぐあとに腎臓をわるくなさったようだ。

* * *

人工透析と縁が切れなくなってからも、吉田さんはますます活躍の度を強められた感がふかい。そのひとつが「ブルースト研究会」である。これには日本全体を司るいわば東のそれもあるが、ここではもちろん関西のそれが話題である。

ブルースト研究会としては、関西の方が半年ほど先輩だったろうか。吉田さんが研究会をつくろうと言いだされて、準備会を二、三度ひらいたあと、1987年の3月ごろには第1回の会合をひらいた。

研究会は、学会を避けて一年に三回、大まかなところ3月、9月、12月の土曜日に開催することにした。3月はいろいろな行事があって忙しい場合には、4月初旬もいいことになった。各回の発表者の数は2名ないし3名、発表者のうち会報を印刷する者を自主的に選び、その人が次回の会合に持参することとした。会報は、従って前回のもの、3ヶ月か、6ヶ月遅れのものとなる。こういうわけで、各回ごとに会報を出すことに決まった。なお配布値段はA4版1ページが10円、これだけは20年かわらない。

「ブルースト研究会報告」第1号は、発行が1987年6月20日、テーマは就寝劇で、11人が執筆、31ページ、最後のページは会員名簿で14名を数えた。第2号は、発行が1987年9月19日、テーマはマルタンヴィルの三つの鐘塔とユディメニルの三本の木で9人が執筆、20ページで会員数14名といった具合である。

会場が同志社大学であったのは2001年3月31日の第46回まで、2001年9月22日の第47回からは京都大学に替わった。と、いうのも私自身が脳梗塞のせいで三ヶ月の入院を余儀なくされたからである。同志社は、冷泉家の屋敷を見おろし御所の緑をのぞむ、二十数人がはいれる場所で、地下鉄にも近く、皆には気に入ってもらえたものだ。司会はもちろん吉田さんであった。報告はそのうちに発表者以外はめったに書かなくなり、2人または3人が執筆する20枚前後のものとなった。その分、学会発表やフランスで博士号をとる下準備としても、大きな役割を果たしてきた。また、近年、ブルーストに関するさまざまな著作となって、この成果を結実させておられる方々もある。

報告は、2006年3月現在で第59号となり、正式に年3回の集積として60回の会合を20年にわたって築きあげてきた。なかでも2005年9月発行の（とはつまり同年4月9日の57回開催時には吉田さんが入院とはいえ元気になっておられたということだが）第57号は、オスマン通り102番地において、2000年7月に撮られたカラー写真のお姿が忘れがたい。鏡に映った、ジャック・エミール・ブランシュによる有名なブルーストの肖像画のまえに立っていられる、吉田さんの姿である。

そして2005年12月の第58号（同年9月17日の会合）で、小黒昌文氏はプロードル『ヴェネツィア』の一節を引いている。それはサン・マルコ寺院のカンパニーレの崩壊の瞬間をとらえたもので、そえられた写真とともに、なぜか、すばらしい。ゴンドラの船頭が凄いいことばを発したのだ、「カンパニーレは誰ひ

とり殺さずに崩壊した。それはgalant hommeとしてみずから倒れたのだ」と。写真がすばらしいのは、塔の崩壊が1902年7月14日9時55分とあるのに、写真は9時52分といまだ崩壊中の塔をしめしていることだ。完全な崩壊まで二、三分の間がある。基部がくずれかかり、縦に亀裂がはいり、わずかに傾きながら、頭部は毅然として姿を維持しようとする塔。人の死も、このようなものであろうか。吉田さんが亡くなったのは2005年6月24日、まさに大いなる「galant homme」として逝ってしまわれた。

* * *

ブルーストに関しては、吉田さんが暇な折に間いただしておきたいと思いながら、自分の怠惰と気弱さから、ついに訊ねそびれてしまったことがある。

『花咲く乙女たちのかげに』で、バルベックのホテルの窓に、天候により、時刻と月日の推移によって、一連の空想美術館の画面を展開する有名な場面がある¹⁾。

- (一) ピサネロの羽毛や綿毛の素描、ガレのガラス細工の積雪層といった繊細さを秘めた一面の波立つ海の風景、
- (二) 中世の宗教的象徴性に彩られた祭壇画とその断片と化した落日の光景、
- (三) なにか北斎の大胆な構図をおもわせる、切りぬいたような真っ赤な太陽と黄色い湖、幾振りかの黒い剣と映る舟の帆柱と、ひとすじの淡い桃色からなる浮世絵風景、
- (四) 遠く水平線上にかすむ船体が一面の青のなかに透かし模様と化した印象派の絵画、
- (五) 時代から行ってブルーストにはまだそれを名ざす手はないのだが、後世のわれわれにはモンドリアンを超えてほとんどフォンターナの抽象的単純を思わせる青のコンポジション、
- (六) 一連の「雲のエチュード」と、書棚のさまざまなガラス戸が呈示する、雲の同一効果をしめす異なった時刻における反復描写、
- (七) 画面のかたすみに蝶の署名がそっと羽根をそえるような、チェルシーの巨匠、ホイッスラー風の「グレーとピンクのハーモニー」。

この窓からのぞむ海の風景の描写は、カイエ38にその起源をもっているが、そこからの抜粋エスキスLⅢをみると、まだ一連の海景画の展示という段階にいたっていない²⁾。「小さかったころに最初の絵具箱で知ってからというもの、ほとんど二度と見たこともない、魅力的な淡いピンク」という言葉に(三)へ

の下地が窺えるのみ。「いまし方まで夕日によって金色になっていた三本マストの船は、単にピンクの反映を帯びるばかりか、珊瑚色の大気が空を索具よろしく透かし模様にするために加わったかのように、空と似たような素材のうちに、まるくなったピンクの雲をみごとに切りぬいた観があった」というところには、(四)の文章構造があきらかに仕組まれているが、決定稿では「三本マスト (の船)」は姿を消している。(五)の要素は、ほとんど拾いえない。(六)にいたっては「雲のエチュード」はまだ姿すらみせていない。そして最後に「海のやわらかで朧な灰色から浮かびでて、蝶が一羽、窓ガラスの外側に、とはいえ一瞬、部屋の中にいると思ったほどののだが、私の窓が呈しているこの真のホイッスラーの画面の下方に、チェルシーの巨匠のお気に入りのサインを添えるのであった」というのが、いまだにペンの冴えに到りえないブルーストの苦闘を伝えている。が、この(七)こそ、一連のエスキスのなかで、もっとも彼の構想がはっきり込められるものなのである。ところで私が吉田さんについて糺しそびれた疑問とは、(六)に関わるものである。問題は、フランス語の本質にかかわるものなので、原文をひいておく(以下、イタリックは筆者による)。

Un autre jour, la mer n'était peinte que dans la partie basse de la fenêtre dont tout le reste était rempli de tant de nuages poussés les uns contre les autres par bandes horizontales, que les carreaux avaient l'air, par une préméditation ou une spécialité de l'artiste, de présenter une « étude de nuages », cependant que les différentes vitrines de la bibliothèque montrant des nuages semblables mais dans une autre partie de l'horizon et diversement colorés par la lumière, paraissaient offrir comme la répétition, chère à certains maîtres contemporains, d'un seul et même effet, *pris* toujours à des heures différentes mais qui maintenant avec l'immobilité de l'art *pouvaient* être *tous vus* ensemble dans une même pièce, *exécutés* au pastel et *mis* sous verre.

強調した部分は、この関係節がかかっていくのが、あくまでも男性複数の名詞であることを示しているが、これに対応する名詞が存在しない。対応する先行詞群のなかで「des heures différentes」は女性形で無理、「certains maîtres contemporains」は一見したところ適う気もするようだが、結局はだめなように思われる。というのも、「la répétition d'un seul et même effet」の結びつきが、より強い拘束力を発揮しているからである。いいかえれば、関係代名詞 qui がひきうける語句は「des nuages semblables」と同じ意味をもつ語句であ

るはずのものだが、先行詞そのものとしては、あくまでも欠落しているようである。私にはつぎの [A] , [B] , [C] のいずれかに « des nuages » または « de ceux-ci » のどちらかが埋まれば、ことははっきりすると思われる。[C] , [A] , [B] の順で位置どりは応ずるように思われるが、いかがであろうか。

comme la répétition [A], chère à certains maîtres contemporains, [B] d'un seul et même effet, [C] pris toujours à des heures différentes mais qui maintenant avec l'immobilité de l'art pouvaient tous vus ensemble dans une même pièce exécutés au pastel et mis sous verre

翻訳者にとっても、これはいささか手古ずる箇所であったらしい（以下、下線強調は筆者）。

1958年 井上究一郎訳：一方、書棚の種々のガラス戸は、同じその雲の、水平差による光のさまざまな色づけを映しながら、近代のある画家達に親しい筆法であるところの、種々の違った時間に観察された同じ一つの対象の反復描写を並べ、そうした時間の相違が、芸術に不動化され、あるいはパステルを用い、あるいはガラスをはめて、いま全部一緒に一室のなかで見られるようにしている、といった感じを与える。

（新潮文庫版DⅡ, p.173. 1974年全七巻版2, p.336.）

1992年 井上究一郎訳：一方、書棚の個々のガラス戸は、おなじような雲の、水平線別による光のさまざまな色づけを映しながら、現代のある画家たちに親しい筆法である、種々のちがった時間に観察されたおなじ一つの対象の効果の反復、といったものをならべ、そうした時間の相違が、芸術に不動化され、あるときはパステルを用い、あるときはガラスをはめて、いま全部いっしょに一室のなかで見られるようにしている、そんな感じをあたえるのであった。

（ちくま文庫版3, p.198.）

1997年 鈴木道彦訳：一方、本箱のさまざまなガラスが差し出す同じような雲は、水平線の別の部分なので、光の加減で異なった色に染め分けられており、現代の何人かの巨匠が得意とするような、たった一つの同じものが与える効果を常に違った時刻でとらえてくり返す手法のごときものを示しているように思われたが、ただしそれらはパステルで仕上げられ、ガラスをはめられ、今や動かない芸術作品となって、すべてが同じ一つの部屋のなかでいっしょに眺められるのであった。

（集英社版4, pp.205-206.）

井上訳は、二つの訳ともに、件の関係節の先行詞を「そうした時間の相違」ととらえているのが、やはり間違いというべきで、この思い違いが「あるいはパステルを用い、あるいはガラスをはめて」という解釈上の齟齬をみちびくと考えられる。そもそも « pris », « pouvaient », « tous vus », « exécutés », « mis » に対応する先行詞は、男性複数という初歩の文法的制約を、やはり重いものと受けとり、もうすこし考えを練るべきであったといえよう。これに対する鈴木訳は、関係代名詞を受けとるのも「ただしそれらは」となっていて、間然するところがない。氏は、この欠落を十分に意識していたものと思われる。ここで私の試訳も示しておく。

一方、書棚のさまざまなガラス戸は、同じような雲を示していて、しかもそれが水平線の別の部分なので、光によって種々の色合に染め分けられているものだから、当代の幾人かの巨匠によく見られるように、つねに異なった時刻に観察された、同一物があたえる効果の反復描写を呈示しているように思われたが、ただしそれらの雲は、パステルで描かれ、ガラスの下に納められて、いまや芸術作品の不動性をもって、同じ部屋のなかですべていっしょに眺められるのであった。

いずれにしろ関係代名詞の真の先行詞（「雲」またはそれに類する男性複数の名詞または指示代名詞）が欠けている。しかも、このことが大方の読者には欠落と映らなかったという事実、いいかえれば、この欠落があっても何となくこの文章が読めてしまうことが、この問題を微妙なものにしているのだ。« la répétition, chère à certains maîtres contemporains, d'un seul et même effet, pris toujours à des heures différentes mais qui [...] » だけでわかった気になるというのは、« la répétition d'un seul et même effet » 「同一物があたえる効果の反復描写」のなかに、《単数でありながら未然的必然として、すでに複数を志向する契機》が孕まれているからであろう。ブルーストには、自我の分裂として《私》の複数化が説かれるそのかたわらで、文法的にあきらかに単数におかれる《われわれ》がまた介在するという、いわば無根拠なる《私》による本来的に複数なる《われわれ》の単数化への牽引ないし馴致という、きわめて特異な言語学的ねじれ現象がみられることを、その傍証とするべきであろうか³⁾。もっとも、この特異現象は、性数一致の規則などの文法的遵守のただなかで起こるからこそ、意味づけをせまるものであった。

要するに「ただしそれらの雲は」といわず「ただしそれらは」というだけの

方が、ことはたやすく、無意識のうちに、とは暗黙のうちに、私たちはいわば「不在の雲」を読みこんでしまうのだが、文法的不在はあくまでも不在、欠落はあくまでも欠落である。プルーストはみずからが造ったことばの構築物のなかで、「同一物のあたえる効果の反復描写」のもつ《単数でありながら未然的必然として、すでに複数を志向する契機》の罫に嵌まってしまったと考えるべきであろうか。文法の制約は、やはり何よりも重いといわねばならない。プレイヤッド版の旧版にも新版にも、このことについてはいかなる補注も存在しないのである。

* * *

私は自問自答をくりかえしただけらしい。吉田さんは訊ねればいつでも受けてくださったはずだが、自分の怠惰と臆病さゆえに、結局はどうすることもできなくなってしまった。

これからはその優しい笑みをもって、私たちの行方を見守ってくださるようにと祈るばかりである。

註

- 1) Proust, *A la recherche du temps perdu*, II, Gallimard, 1988, pp.160 et 162-163.
- 2) *Ibid.*, pp.961-962.
- 3) 拙稿「プルースト その象徴のロマネスク」第2章「複数の《私》と単数の《われわれ》 その象徴化のロマネスク」, 宇佐美斉編『象徴主義の光と影』, ミネルヴァ書房, 1997, pp.221-226.

(やまじ・りゅうてん 同志社大学名誉教授)